中京学院大学看護学部
紀要　第５巻第１号
2015年３月発行

〈研究報告〉

東濃地区における第一子幼児（１歳６ヵ月児）を育てる母親の育児状況と育児ストレスに関する要因の検討

Examination of Factors about Parenting Situation and Parenting Stress of Mother who Child-Rearing the First Child Infants (1Year 6-Months Child) in TONO Area

谷口美智子・小倉由紀子・高田理衣・加藤　泉
Michiko Taniguchi, Yukiko Ogura, Rie Takada and Izumi Kato

要　旨

近年，育児ストレスに関する問題は，日本も含め全世界的な課題になっている．今回，第一子幼児（１歳６ヵ月）を育てている母親の育児状況と育児ストレスの関係を明らかにすることを目的とした．

方法は手島と原口（2003）の調査を参考に質問紙を作成し，東濃地区で１歳６ヵ月児健康診査（以下，健診）を受診する母親を対象に調査を実施，結果を集計し評価した．

その結果，「おもちゃなどで大人と遊びたがったり，大人の反応を求めたりする」，「一人歩きをする」，「意味のあることばを話す」等に関して負の相関を示した．しかし，「夜泣きをする」（$\rho=.901$，$p<.01$），「じっとせずウロウロ歩き回る」（$\rho=.821$，$p<.01$），「理由もなく泣くまたはぐずる」（$\rho=.789$，$p<.01$）等，20項目に関しては正の相関を示した．

母親にとって，手を煩わせない幼児には育児ストレスを感じていないが，自我の発達，泣き，行動範囲の拡大に伴う頻度に関して育児ストレスを感じていたことが明らかになった．

キーワード：１歳６ヵ月児，母親，育児状況，育児ストレス

Ⅰ．はじめに

近年，少子化の進行に伴い育児に関する問題は，日本も含め全世界的な課題になっており（Ramos-Marcuse F, Oberlander SE, Papas MA, et al. 2010），特に育児ストレスに関して取り上げられている．育児ストレスの背景の一つとして，核家族化，地域共同体の機能の衰退などが考えられる．かつて日本では，親は家族の中で，祖父母や他の家族員から支援を受けることが多かったが，近年では核家族が一般的となり，祖父母からの支援を受けにくくなっている．

また地域共同体の機能が衰退する現代においては，隣近所の住民から自然に支援を受けるといった，いわゆる昔ながらの育児ができる地域は少なくなっており，加藤により「育児の社会的孤立」（1992）の問題が指摘されている．そのため，現代の子育ての家庭環境や社会環境は養育者のストレッサーとして大きな影響を与えていると考えられる．

育児ストレスおよび育児不安の軽減は，母親にとって次子の家族計画につながり，少子化の進行に歯止めをかけるための一要因である．そのために我が国では，孤立化しやすい母親への支援，乳幼児虐待の予防という観点から，重要課題の一つになっている．厚生労働科学研究費補助金研究班による「健やか親子21」における課題の1つに「子どもの安らかな発達の促進と育児不安の軽減」（2005）が挙げられ，具体的な取り組み目標が設定されている．

母親自身の育児ストレスを焦点とした研究は多いとは言えず，今回，第一子幼児（１歳６ヵ月）を育てる母親が自分なりの育児方法を模索し母親役割に適応していく過程で育児状況と育児する母親に生じるストレスの現状を明らかにする．手島と原口は，「子どもの自我の発達に伴う自己主張の強まりが生み出す親子関係の葛藤から育児困難感や育児不安につながる可能性が大きい」（2003）と述べている．

そこで，市町村において実施されている1歳6ヵ月児健診は母子関係にとって一つの危機的状況を含んだ自我の発達が著しい幼児への移行期での健診であり，この機会を活用し調査することとした．

Ⅱ．研究目的

１歳６ヵ月児健診を受診する第一子幼児を育てている母親の育児状況と育児ストレスの現状を明らかにすることを目的とした．

これにより東濃地区５市保健センターにおける育児支援が母親の子どもの発達に関する理解を助け，育児対処能力を高めるような支援につなげたい．

Ⅲ．用語の定義

１．育児ストレス

清水は，育児ストレスとは，焦燥感や怒り，疲労感や空虚感などのネガティブな感情に注目すべきであるとして，「育児中に経験するネガティブ感情」（2000）を定義としている．本研究でも同様に育児によって引き起こされる育児に対するネガティブな感情とする．

Ⅳ．研究方法

１．研究対象

平成24年度に，東濃地区５市保健センターにおいて１歳６ヵ月健診を受診した第一子幼児を育てる母親101名．

２．調査期間

平成24年８月～平成24年９月

３．研究デザイン

１歳６ヵ月児健診を受診する第一子幼児を育てている母親を対象に，手島と原口によって開発された「育児状況と育児ストレス尺度」（2003）を用いた質問紙による調査研究である．

４．調査方法

東濃地区５市保健センター長宛に当研究の目的・方法・内容を口頭および文書にて説明し調査を依頼した．データ収集方法に関して，１歳６ヵ月児健診実施日に合わせ，受診する第一子幼児を育てている母親（調査対象者）に質問紙を配布した．同時に研究の趣旨を文書と口頭で説明し，調査を行った．調査対象者は質問紙に記述した後，同封の封筒にて調査者に返送することを依頼した．

５．分析方法

すでに信頼性と因子的妥当性の尺度であることが示されている手島と原口によって開発された「育児状況尺度」,「育児ストレス尺度」(2003) を用いる.

育児状況に関しては23項目の頻度ごとに４段階の尺度「ほとんどない」,「たまにある」,「ときどきある」,「いつもある」, 育児ストレスに関しては23項目の頻度ごとに４段階の尺度「全く感じない」,「少し感じる」,「かなり感じる」,「非常に感じる」のうちいずれかで回答を求め, 単純加算得点をもって尺度得点とした.

質問紙の逆転項目（※）に関しては点数を逆転して集計し総得点を出した. 尺度に従い点数化し, 頻度に対して単純集計後, 因子関連およびSpearman相関分析を行った. 統計的解析にはWindows版IBM SPSS StatisticsシステムVer19を用いた. 有意水準は５％未満とした.

６．質問紙の構成

１）フェイスシート（属性）

母親の年齢, 最終学歴, 現在の健康状態, 母親の職業, 夫の職業, 住居, 子どもの性別, 理想の子どもの数, 現在の子どもの数に満足か, 第２子の希望などについての質問紙.

２）育児状況, 育児ストレスなどについての質問紙

７．調査地の概要

本調査地である東濃地区は岐阜県の東部に位置し, 南は愛知県, 東は長野県と接している. 丘陵地や, 中山間地域などからなっており, 森林資源が豊富で, 過去に大規模な地震の記録がない強固な地盤に恵まれた緑多い地域である. 総面積は約16万haで県の面積の約15％を占め, 人口は約34万人と県全体の約17％を占めている. 急速に工場立地が進みつつある地域で, 近年, 新興住宅も増えている.

また, 2012年総務省「国勢調査」, 岐阜県統計課「人口動態統計調査」（年報）によると, 東濃地区各市の人口密度はかなり高く, ５市ともに核家族数が増加している.

８．倫理的配慮

研究協力者に対して, 研究目的, 内容やプライバシーの保護には厳重に注意するものであること, 研究協力への任意性と中断の自由, 研究結果の公表方法について, 文書と口頭で説明し, 協力参加の有無により健診で不利益にならないように配慮した. 質問紙が返送された時点で調査の同意を得られたものとした.

また, 本研究は所属機関研究倫理審査委員会の承認を得たものである.

Ⅴ．結果

１．対象の背景

有効回答数は第一子幼児（１歳６ヵ月）を育てる母親62名（有効回答率61％）であった.

２．単純集計結果

１）フェイスシート（属性）

(1) 母親の年齢

24歳以下４名 (6.5％), 25～29歳21名 (33.9％), 30～34歳24名 (38.7％), 35歳以上13名 (21.0％) であった.

(2) 最終学歴

中学１名 (1.6％), 高校25名 (40.3％), 短大, 高専, 専門学校20名 (32.3％), 大学16名 (25.8％) であった.

(3) 現在の健康状態

非常に良い11名 (17.7％), 大体よい24名

(38.7%)，普通24名（38.7%），あまり良くない３名（4.8%）であった．

(4) 母親の職業

専業主婦41名（66.1%），フルタイム９名（14.5%），パートタイム３名（4.8%），育児休業中６名（9.7%），その他３名（4.8%）であった．

(5) 夫の職業

会社員47名（75.8%），公務員７名（11.3%），自営業６名（9.7%），求職中１名（1.6%），その他１名（1.6%）であった．

(6) 住居について

アパート24名（38.7%），マンション４名（6.5%），一戸建て34名（54.8%）であった．

表１ フェイスシート(属性)

n=62

		人	%
母親の年齢	24歳以下	4	6.5
	25～29歳	21	33.9
	30～34歳	24	38.7
	35歳以上	13	21.0
最終学歴	中学	1	1.6
	高校	25	40.3
	短大 高専 専門学校	20	32.3
	大学	16	25.8
現在の健康状態	非常に良い	11	17.7
	大体よい	24	38.7
	普通	24	38.7
	あまり良くない	3	4.8
母親の職業	専業主婦	41	66.1
	フルタイム	9	14.5
	パートタイム	3	4.8
	育児休業中	6	9.7
	その他	3	4.8
夫の職業	会社員	47	75.8
	公務員	7	11.3
	自営業	6	9.7
	求職中	1	1.6
	その他	1	1.6
住居について	アパート	24	38.7
	マンション	4	6.5
	一戸建て	34	54.8
子どもの性別	女	34	54.8
	男	28	45.2
理想の子どもの人数は	1人	4	6.5
	2人	39	62.9
	3人以上	19	30.6
現在の子どもの人数に満足しているか	満足している	11	17.7
	まあ満足している	24	38.7
	やや不満である	16	25.8
	不満である	11	17.7
第２子について	ほしい	56	90.3
	まだわからない	4	6.5
	ほしくない	2	3.2

(7) 子どもの性別

女児34名（54.8%），男児28名（45.2%）であった．

(8) 理想の子どもの数

1人４名（6.5%），２人39名（62.9%），３人以上19名（30.6%）であった．

(9) 現在の子どもの数に満足しているか

満足している11名（17.7%），まあ満足している24名（38.7%），やや不満である16名（25.8%），不満である11名（17.7%）であった．

(10) 第２子の希望

ほしい56名（90.3%），まだわからない４名（6.5%），ほしくない2名（3.2%）であった．

２）育児状況と育児ストレスに関する平均値と標準偏差

育児状況と育児ストレスに関する頻度ごとの平均値±標準偏差を記述する．

「大人と遊びたがったり，大人の反応を求めたりする」に関しての育児状況3.35±0.85，育児ストレス1.48±0.53，「一人歩きをする」の育児状況3.79±0.70，育児ストレス1.19±0.40，「意味のある言葉を話す」では育児状況1.90±1.02，育児ストレス2.71±1.44であった．

「いやという拒否が強い」育児状況3.00±0.85，育児ストレス2.23±0.71，「夜泣きをする」育児状況1.73±0.94，育児ストレス1.55±0.80，「睡眠時間がまちまちである」育児状況1.58±0.78，育児ストレス1.35±0.51，「湿疹がある」育児状況1.39±0.66，育児ストレス1.29±0.58，「哺乳ビンを使っている」育児状況1.16±0.63，育児ストレス1.03±0.17，「歯みがきを嫌がる」育児状況3.06±1.11，育児ストレス2.11±0.89，「自分で食べたがらない」育児状況1.84±1.04，育児ス

トレス1.61±0.69,「下痢または便秘をする」育児状況1.66±0.79，育児ストレス1.27±0.49,「まとわりついて離れない」2.45±0.95育児ストレス1.63±0.75,「ぐずるとなだめにくい」育児状況2.03±0.92，育児ストレス1.84±0.83,「おむつでかぶれる」育児状況1.34±0.60，育児ストレス1.19±0.40,「指しゃぶりをする」育児状況1.79±1.26，育児ストレス1.27±0.68,「人見知りをする」育児状況2.00±0.96，育児ストレス1.27±0.61,「激しく泣く」育児状況2.11±0.83，育児ストレス1.82±0.90,「寝つきが悪い」育児状況1.85±0.94，育児ストレス1.66±0.77,「理由もなく泣くまたはぐずる」育児状況1.60±0.74，育児ストレス1.53±0.76,「病気になる」育児状況1.52±0.72，育児ストレス1.42±0.71,「かんしゃくを起こす」育児状況2.03±0.87，育児ストレス1.81±0.82,「少食である」育児状況1.82±1.08，育児ストレス1.60±0.93,「じっとせずウロウロする」育児状況2.84±1.10，育児ストレス1.77±0.80であった.

表２　育児状況と育児ストレスに関する平均値と標準偏差

n=62

頻度	育児状況 Ⅰ（*n*=62）		育児ストレス Ⅱ（*n*=62）	
	Ave	SD	Ave	SD
大人と遊びたがったり、反応を求める	3.35	0.85	1.48	0.53
いやという拒否が強い	3.00	0.85	2.23	0.71
夜泣きをする	1.73	0.94	1.55	0.80
睡眠時間がまちまちである	1.58	0.78	1.35	0.51
湿疹がある	1.39	0.66	1.29	0.58
哺乳ビンを使っている	1.16	0.63	1.03	0.17
一人歩きをする	3.79	0.70	1.19	0.40
歯みがきを嫌がる	3.06	1.11	2.11	0.89
自分で食べたがらない	1.84	1.04	1.61	0.69
意味のあることばを話す	1.90	1.02	2.71	1.44
下痢または便秘をする	1.66	0.79	1.27	0.49
まとわりついて離れない	2.45	0.95	1.63	0.75
ぐずるとなだめにくい	2.03	0.92	1.84	0.83
おむつでかぶれる	1.34	0.60	1.19	0.40
指しゃぶりをする	1.79	1.26	1.27	0.68
人見知りをする	2.00	0.96	1.27	0.61
激しく泣く	2.11	0.83	1.82	0.90
寝つきが悪い	1.85	0.94	1.66	0.77
理由もなく泣くまたはぐずる	1.60	0.74	1.53	0.76
病気になる	1.52	0.72	1.42	0.71
かんしゃくを起こす	2.03	0.87	1.81	0.82
少食である	1.82	1.08	1.60	0.93
じっとせずウロウロする	2.84	1.10	1.77	0.80

３．相関分析結果

それぞれの相関（相関係数と有意確率）については頻度ごとにspearman相関係数の検定をしたので記述する.

表３　育児状況と育児ストレスの相関係数

n=62

頻　　度	相関
大人と遊びたがったり、反応を求める	-0.133
いやという拒否が強い	0.533 **
夜泣きをする	0.901 **
睡眠時間がまちまちである	0.752 **
湿疹がある	0.830 **
哺乳ビンを使っている	0.719 **
一人歩きをする	-0.031
歯みがきを嫌がる	0.631 **
自分で食べたがらない	0.587 **
意味のあることばを話す	-0.159
下痢または便秘をする	0.592 **
まとわりついて離れない	0.533 **
ぐずるとなだめにくい	0.785 **
おむつでかぶれる	0.819 **
指しゃぶりをする	0.733 **
人見知りをする	0.577 **
激しく泣く	0.638 **
寝つきが悪い	0.803 **
理由もなく泣くまたはぐずる	0.789 **
病気になる	0.646 **
かんしゃくを起こす	0.640 **
少食である	0.821 **
じっとせずウロウロする	0.443 **

**p<.01, *p<.05

頻度の23項目中「おもちゃなどで大人と遊びたがったり，大人の反応を求めたりする」（ρ =-.133），「一人歩きをする」（ρ =-.031），「意味のあることばを話す」（ρ =-.159）等の３項目に関しては負の相関を示した.

しかし，頻度の23項目中，以下の20項目では正の相関を示した.

「夜泣きをする」（ρ=.901，p<.01），「湿疹がある」（ρ=.830，p<.01），「じっとせずウロウロ歩き回る」，「少食である」（ρ=.821，p<.01），「おむつでかぶれる」（ρ=.819，p<.01），「寝つきが悪い」（ρ=.803，p<.01），「理由もなく泣くまたはぐずる」（ρ=.789，p<.01），「ぐずるとなだめにくい」（ρ=.785，p<.01），「「睡眠時間がまちまちである」（ρ=.752，p<.01），「指しゃぶりをする」（ρ=.733，p<.01，「哺乳瓶を使っている」（ρ=

.719, $p<.01$）等，11項目についてはかなり強い（高い）相関があり，「病気になる」（$\rho=.648$, $p<.01$），「かんしゃくを起こす」（$\rho=.640$, $p<.01$），「激しく泣く」（$\rho=.638$, $p<.01$），「歯みがきを嫌がる」（$\rho=.631$ $p<.01$），「下痢又は便秘をする」（$\rho=.592$, $p<.01$），「自分で食べたがらない」（$\rho=.587$, $p<.01$），「まとわりついて離れない」「いやという拒否が強い」（$\rho=.533$, $p<.01$），「人見知りをする」（$\rho=.577$, $p<.01$）等，９項目についてはかなり相関があった．

Ⅵ．考察

本調査において，第一子幼児（１歳６ヵ月）を育てる母親を対象に，育児状況と育児ストレスの現状について調査し，分析検討した．

１．属性と育児状況の現状

本調査対象者の背景として母親の年齢，最終学歴は，全国平均と比較して標準的な第一子出産後の女性であった．

「母親の職業」（就労状況）を見ると母親の66.1％が専業主婦であった．総務省「平成22年労働力調査」によると「０～３歳の母親の60.2％が専業主婦」（2010）となっており，この労働力調査と比較すると今回の調査では専業主婦の割合が若干高い集団と考えられる．村上・飯野・塚原，他は，「専業主婦の育児ストレスが高い」（2005）と報告している．このことは，就労に関する懸念，育児によって自分が社会から取り残される感覚，また，母としてしか見てもらえず自分というものが確認しにくくなる不安などと考えられる．原田による，「近所でふだん世間話や子育ての話ができる人が誰もいない割合が増えている」（2006）との報告もあり，社会的孤立の状況はますます深刻化していると推測する．このことから，多様な就労システムの構築や身近な地域社会に母親がつながることができる工夫を社会全体で考える必要がある．

「住居について」では，今回，「一戸建て」と回答した母親が「アパート」，「マンション」と回答した母親より若干多かった．西村・津田・林，他によると，「集合住宅に住んでいる者が，一戸建てに住んでいる者より一人で子どもを育てていると思うものが多い」（2000）という育児ストレスにつながる報告がある．一戸建てに住んでいる母親より，「アパート」，「マンション」に住んでいる母親のほうが隣近所との交流が少なく，また，壁ひとつを介した隣近所への迷惑を心配し，育児ストレスが増すと推察する．要因については今後詳細に検討していく必要があるが母親の精神的負担を軽減することは重要であると考える．

２．育児状況と育児ストレスの現状

第一子幼児（１歳６ヵ月）をもつ母親は育児状況に関し，「おもちゃなどで大人と遊びたがったり，大人の反応を求めたりする」，「一人歩きをしたり」，「意味のあることばを話す」等，児の成長を感じるような項目に負の相関を示した．このことは，総じて人見知りせず，大人と意思の疎通ができて一人で歩くことができるなどの母親の手がかからないことが，育児ストレスが少ない要因であることが明らかになった．育児する母親の手を煩わせない幼児には育児ストレスを感じていない．

しかし，「夜泣きをする」，「湿疹がある」，「じっとせずウロウロ歩き回る」，「少食である」，「おむつでかぶれる」，「寝つきが悪い」，「理由もなく泣くまたはぐずる」，「ぐずるとなだめにくい」，「睡眠時間がまちまちである」，

「指しゃぶりをする」，「哺乳瓶を使っている」，「病気になる」，「かんしゃくを起こす」，「激しく泣く」，「歯みがきを嫌がる」，「下痢又は便秘をする」，「自分で食べたがらない」，「まとわりついて離れない」，「いやという拒否が強い」，「人見知りをする」等については正の相関を示した（$p<.01$）ことから，以上の20項目の頻度に関し，母親は育児ストレスを感じていたことが明らかになった．

子どもの日々の発達や成長は母親にとって育児をする上での直接的な励みとなることが多いが，その一方で育児は多くのストレスをもたらす．子どもの成長に伴って発生してくる自我の発達段階とも考えられる頻度「いやという拒否が強い」，「じっとせずウロウロ歩き回る」，「かんしゃくを起こす」，「歯みがきを嫌がる」，「まとわりついて離れない」，「人見知りをする」が挙げられる．これらについて，北村・土屋・細井は，「自我の発達，成長発達に伴う子どもの行動範囲の拡大や反抗などが母親の育児ストレスの増加につながっている」（2006）と述べている．

また，現代においては，社会および親の生活時間の変化に伴い，子どもの睡眠リズムが崩れてきているといわれている．「睡眠時間がまちまちである」，「寝つきが悪い」に関しては，平松・高橋・大森，他は，「子どもの睡眠リズムは親の育児ストレスに関連している．母子相互作用が良好な母親の中にも，子どもの睡眠に過敏に反応し，それが育児ストレスになることもある」（2006）と述べている．このことは，子どもの睡眠時間や寝つく時間の影響で育児する母親が一人になれる，自由な時間が確保できにくいということにもなり，育児ストレスにつながると考えられる．さらに，育児する母親だけでは解決できない種類の幼児期に起こりがちな頻度として「湿疹がある」，「おむつでかぶれる」，「指しゃぶりをする」，「病気になる」，「下痢又は便秘をする」がある．これらに対して，藤尾・神庭は，「乳幼児を持つ母親の育児上の心配事は，月齢によって変化を示すとしたうえで，咀嚼機能，排泄，言語，睡眠，児の健全な性格形成，社会性の発達等について」（2003）を挙げている．これらは，母親自身で解決できないことが育児ストレスにつながると推察され，適切な助言や育児支援によって緩和すると考えられる．

そして，食に関する頻度，「自分で食べたがらない」，「少食である」，「哺乳瓶を使っている」に関して，子どもに食べさせることは，成長・発達および健康の点から，母親が関心を向ける問題の一つであり，子どもの食の細さや思ったような食べ方をしないことが育児ストレスにつながると考えられる．園部・白川・廣瀬は，「母親のネットワークの多さが，身辺自立の基礎としての食行動の発達を促進する」（2006）と述べているが，住田と溝田は「悩みを共有できる仲間はすべての場合において育児ストレスを緩和するものではなく，他の子どもと自分の子どもを比較して焦りが増幅される場合もある」（2000）と述べている．１歳６ヵ月という時期は，子どもの体格や発達に個人差が表れ，母親が比較しがちになることから，育児ストレスにつながると考える．

さらに，泣きやぐずりに関しての頻度には，「夜泣きをする」，「理由もなく泣くまたはぐずる」，「ぐずるとなだめにくい」，「激しく泣く」等がある．高橋・桐田は，子どもの泣き声が育児中の女性に及ぼす心理的影響として，「子どもの啼泣の仕方や睡眠パターンの変化

は母親にとって非常にストレスフルである」，「育児中の女性は徐々に泣き声に耐えられなくなりストレスが高まる」（2011）と報告している．また，川井・庄司・千賀は「子どもが『よく泣いてなだめにくい』『訳も分からず泣く』ことは，育てにくさを示す子どもの気質の一つである」（1999）と述べている．思いあたる理由もないのに泣き続けることがあるし，また何をしても泣きやまないこともあるが，現代の母親は，生育過程において乳幼児をあやしたり，抱っこをするなどの育児体験が少なく，子どもにうまく対応できないことも影響していると考えられる．

このような時に悩みを聞いたり，相談できるような支援体制を整備することは母親の育児ストレスを軽減させる要因であると考える．

筆者の先行研究の中で，育児経験が初めてとなる東濃地区の第一子幼児を育てる母親は，「夫に相談できる」と感じ，身近な存在としての夫が，重要な役割を担っていることも明らかになっている（2014）．夫の育児参加は母親の育児に対する肯定感を高めることにつながるため継続できるようにサポートしていくことが重要である．

そして，母親の育児ストレスに対処するためには，育児が責任や制約などの否定的側面だけでなく，「育児がしやすい」，「楽しいと感じる」，「自己成長を促す」などの肯定的側面を感じ取れるような支援策が必要になると考えられる．

Ⅶ．結論

１．育児する母親の手を煩わせない幼児に育児ストレスを感じていない．

２．子どもの成長に伴って発生してくる自我の発達と考えられる頻度，子どもの行動範囲の拡大や反抗，幼児期に起こりがちな泣き，ぐずりに関して，強いストレスを感じていた．

３．育児ストレスを緩和させるためにも夫や家族，社会資源を活用し，悩みを聞いたり，相談できるような支援体制を充実させることが必要である．

Ⅷ．おわりに

本調査の限界として，まずは対象者数が少ないこと，回収率の問題がある．

今後，「母親の職業」，「住居」が育児ストレスに及ぼす要因，対象者確保の方法など，より多くの対象者における調査と検討が必要である．

また，横断調査であり，育児ストレスについて同一の母親を縦断的に調査した研究ではないため，同一の母親を前向き調査することで，成長発達に伴う養育上のストレスの変化がより明らかになるといえる．

さらに，母親がもつ育児ストレスはさまざまであり，個人・家族だけでは解決できない種類の育児ストレスの軽減に対しては，社会全体の取り組みが必要であることが示唆された．育児ストレスの軽減に向けて社会全体で取り組むことは，育児のしやすさや楽しさにつながると考える．

謝辞

本調査にあたり，快くご協力いただきました１歳６ヵ月児健診受診のお母さま方と貴重な研究の機会をくださいました東濃地区５市保健センター関係各位に心より感謝申し上げます．

なお，本研究の要旨は第29回日本助産学会において発表いたしました．

【文　献】

藤尾君江・神庭純子（2003）．乳幼児をもつ母親の育児上の心配事．（第2報）1980年と1996年の比較．小児保健研究，62,647-666.

原田正文（2006）．子育ての変貌と次世代育成支援．名古屋大学出版会.

平松真由美，高橋泉，大森貴秀，寺本妙子，廣瀬たい子，三国久美，園部真美，田中克枝，草薙美穂，篠木絵里，白川園子（2006）．小児保健研究．第65巻，第3号，415-423.

細川喜美子,梁由香子,志茂坂真由美（2001）．私たちが考える育児支援．ペリネイタルケア,vol.20 no.7.14-17.

加藤翠（1992）．母親の就労と子育ての変遷と動向.小児内科24（5）,641-644.

神山潤（2003）．睡眠の生理と臨床．診断と治療社．180-200.

川井尚，庄司順一，千賀悠子（1999）．育児不安に関する臨床的研究Ｖ-育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成-．日本子ども家庭総合相談研究所紀要．Vol.35,109-143.

北村真弓，土屋直美，細井志乃ぶ（2006）．子どもの年齢別にみた母親の育児ストレス状況とストレス関連要因の検討－父親との比較に焦点をあてて－．日本看護医学会雑誌，Vol.8,No.1，11-20.

日下部典子，坂野雄二（1999）．母親の職業と育児ストレス．日本行動療法学会大会発表論文集．（25）,106-107.

草野恵美子，小野美穂（2010）.社会的な要因に関する育児ストレスが母親の精神的健康に及ぼす影響．小児保健研究，第69巻，第1号,53-62

厚生労働科学研究費補助金研究班.「健やか親子21」(2005)．http://rhino.yamanashi-med.ac.jp/sukoyaka/,2005

三国久美（2002）．乳幼児を持つ親の育児ストレスに関する縦断研究．平成11年度～平成14年度科学研究費補助金研究成果報告書．43-51.

村上京子，飯野英親，塚原正人，辻野久美子（2005）．乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析．小児保健研究．64,425-431.

西村真実子，津田朗子，林千寿子，木村留美子，関秀俊，飯田芳枝，松本美紀，伴真由美（2000）．石川県における乳幼児の育児の実態と母親の意識．小児保健研究．59(6)，674-679.

Ramos-Marcuse F, Oberlander SE, Papas MA, McNary SW, Hurley KM, Black MM. Stability of maternal depressive symptoms among urban low-income African American adolescent mothers. J Affect Disord 2010 Apr. 122 (1-2). 68-75.

清水嘉子，西田公昭（2000）．育児ストレス構造の研究．日本看護研究学会雑誌．23(5),55-67.

住田正樹，溝田めぐみ（2000）．母親の育児不安と育児サークル．九州大学大学院教育学研究紀要．46，23-43.

総務省統計局（2010）．労働力調査（詳細集計）．末子の年齢別子どものいる世帯における母の就業状態.

園部真美，白川園子，廣瀬たい子，寺本妙子，高橋泉，平松真由美，斎藤早香枝，山崎道子，三国久美，岡光基子（2006）．母親の社会的ネットワークと母子相互作用．小児保健研究，第65巻，第3号，405-415.

高橋有里，桐田隆博（2011）．乳児の泣き声が父親，母親に及ぼす心理生理的影響．社

団法人電子情報通信学会信学技報．7-12.
谷口美智子，小倉由紀子，高田理衣（2014）．東濃地区5市において第一子乳幼児（3,4ヵ月または１歳６ヵ月児）を育てる母親の育児不安と育児ソーシャル，サポートに関する調査．中京学院大学看護学部紀要．第4巻，第1号．13-26.
手島聖子，原口雅浩（2003）．乳幼児健康診査を通した育児支援：育児ストレス尺度の開発．福岡県立大学看護学部紀要1，15-27.

フェイスシート（属性）

問１．　あなたの年齢についてお聞きします。いずれか１つに○をつけてください。
　1．～24 歳　　2．25～29 歳　　3．30～34 歳　　4．　35 歳～

問２．　あなたの最終学歴（中退は含まない）についてお聞きします。いずれか１つに○をつけてください。
　1．中学　　2．高校　　3．短大、高専、専門学校　　4．大学　　5．大学院

問３．　現在、あなたの健康状態についてお聞きします。いずれか１つに○をつけてください。
　1．非常によい　　2．　大体よい　　3．ふつう　　4．あまりよくない　　5．非常によくない

問４．　あなたの職業についてお聞きします。いずれか１つに○をつけてください。
　1．専業主婦　　2．フルタイム　　3．パートタイム　　4．育児休業中
　5．その他（　　）

問５．　ご主人の職業についてお聞きします。いずれか１つに○をつけてください。
　１．会社員　　2．公務員　　3．非常勤　　4．自営業　　5．求職中
　６．その他（　　）

問６．　住居についてお聞きします。いずれか１つに○をつけてください。
　アパート　　マンション　　一戸建

問７．　お子さまの性別についてお聞きします。いずれかに○をつけてください。
　女　　男

問８．　家族計画についてお聞きします。理想の子どもの数は何人ですか。いずれか１つに○をつけてください。
　１人　　２人　　３人以上

問９．　現在のお子さまの数に満足していますか。いずれか１つに○をつけてください。
　１　満足している　　２　まあ満足している　　３　やや不満である　　４　不満である

問１０．　第２子についてお聞きします。現在のお気持ちに近いものいずれか１つに○をつけてください。
　ほしい　　まだわからない　　ほしくない

問１１．　その理由をさしつかえない範囲でお書きください。
　（理由）

次のページへつづく

育児状況と育児ストレス尺度

No.1

質問紙

あなたの子育ての状況と感じ方についてお尋ねします。

Ⅰ　下記のような状況はどの程度起こりますか。「ほとんどない（1）」から「いつもある（4）」までの4段階で評価して、あてはまる数字に○をつけてください。

Ⅱ　その状況に対して、あなたはどの程度ストレスを感じますか。「まったく感じない（1）」から「非常に感じる（4）」までの4段階で評価して、あてはまる数字に○をつけてください。

		Ⅰ					Ⅱ			
	質問項目	ほとんどない	たまにある	ときどきある	いつもある		全く感じない	少し感じる	かなり感じる	非常に感じる
1	おもちゃなどで大人と遊びたがったり、大人の反応を求めたりする　※	1	2	3	4		1	2	3	4
2	「いや」という拒否が強い	1	2	3	4		1	2	3	4
3	夜泣きをする	1	2	3	4		1	2	3	4
4	睡眠時間がまちまちである	1	2	3	4		1	2	3	4
5	湿疹がある	1	2	3	4		1	2	3	4
6	哺乳ビンを使っている	1	2	3	4		1	2	3	4
7	一人歩きをする　※	1	2	3	4		1	2	3	4
8	歯みがきを嫌がる	1	2	3	4		1	2	3	4
9	自分で食べたがらない	1	2	3	4		1	2	3	4
10	意味のあることばを話す　※	1	2	3	4		1	2	3	4
11	下痢（または便秘）をする	1	2	3	4		1	2	3	4
12	まとわりついて離れない	1	2	3	4		1	2	3	4
13	ぐずるとなだめにくい	1	2	3	4		1	2	3	4
14	おむつでかぶれる	1	2	3	4		1	2	3	4
15	指しゃぶりをする	1	2	3	4		1	2	3	4
16	人見知りをする	1	2	3	4		1	2	3	4
17	激しく泣く	1	2	3	4		1	2	3	4
18	寝つきが悪い	1	2	3	4		1	2	3	4
19	理由もなく泣く（またはぐずる）	1	2	3	4		1	2	3	4
20	病気になる	1	2	3	4		1	2	3	4
21	かんしゃくを起こす	1	2	3	4		1	2	3	4
22	少食である	1	2	3	4		1	2	3	4
23	じっとせず、ウロウロ歩き回る	1	2	3	4		1	2	3	4

※　逆転項目